

『豆太郎物語』（ノートルダム清心女子大学黒川文庫蔵）翻刻（上）

中井賢一

本稿は、ノートルダム清心女子大学附属図書館特殊文庫内「黒川文庫」蔵『豆太郎物語』の翻刻を試みたものである。翻刻に際しては、原本の忠実な再現に努めた【翻刻A】と、用字等を通行のそれらに改めた【翻刻B】の二種を呈示することとした。後者については、特に教育の現場での便宜を想定してもいる。同書の書誌情報、及び、翻刻にかかる凡例は、以下の通りである。

【書誌】

- ・「資料記号」H162（詳し）
- ・「版写の別」写本
- ・「冊数」全一冊（帙入）
- ・「装丁」袋綴（四つ目綴）
- ・「料紙」楮紙
- ・「寸法」縦二〇・二種、横一三・三種
- ・「表紙」曙色無地紙

- ・「遊紙」前後とも一丁
- ・「外題」「豆太郎物語 完」（貼り外題。左肩題箋。）
- ・「内題」「まめ太郎物かたり」
- ・「奥書」「享保九年甲辰 八月二十三日」
- ・「丁数」墨付丁数四六丁
- ・「本文書式」每半丁八行、一行一九字内外（界線・罫線とも無し）
- ・「和歌書式」和歌のみ独立した二行目二字下げ、二行目三字下げの書式、及び、一行目二字下げ、二行目字下げ無しでそのまま以降の本文に連接する書式とが混在
- ・「その他」表紙の右肩に「物語」の朱印と「珍本」の朱書あり。外題の題箋上に判読不明の朱書あり。一丁表に「ノートルダム清心女子大学図書之印」、「黒川真頼蔵書」、「黒川真道蔵書」、「黒川真頼」の朱印あり。四六丁表に「真道一読了」の朱書あり。本文全体を通じ、朱書にて、ミセケチによる修訂、及び、句読点様の書き入れ等あり。修訂の筆跡を見る限り、あ

るいは「真道一読了」と同筆かとも思われるが、詳細は不明。
二九丁以降に虫損あり。

【凡例】

- 一 行配りは、原本の通りとした。
- 二 丁移りは、「」の符号で示し、それぞれ「(●)丁才(ウ)」と記した。
- 三 挿絵のある箇所は、「(挿絵)」と記した。
- 四 虫損等による判読不能の箇所は、□で示した(但し、本稿(上)には存在せず)。
- 五 【翻刻A】について、ミセケチは、「取り消し線」で示し、本文に修訂がある場合は、右傍に記した。
- 六 【翻刻A】について、「句読点様の書き入れ」は、当該箇所に「、」で示した。
- 七 【翻刻B】について、用字は、原則、通行のものに改めた。
- 八 【翻刻B】について、助詞「なむ」助動詞「む」「けむ」「らむ」等の表記は、「なん」「らん」など、「ん」表記に統一した。
- 九 【翻刻B】について、【翻刻A】の「句読点様の書き入れ」と一致しない場合も含め、適宜、句点、及び、読点を付した。また、会話文等には、カギ括弧を施した。

十 特記事項については、「(注●)」とした。

【翻刻A】

(表紙・外題) 豆太郎物語
(遊紙)

まめ太郎物かたり

もくろく

- 一 秋のゆふして
- 一 むすふ木のみ
- 一 千本のさくら
- 一 池のうきくさ
- 一 草のまかき
- 一 哥あはせ(二丁才)
- 一 恋の山路
- 一 岩間の花
- 一 鬼のしこ草
- 一 かへる道芝
- 一 千代の松陰
- 一 か、やく朝日
- 一 もくろくをはり(二丁ウ)

まめ太郎物かたり

秋の夕して

むかしみやこ京極のすそ（注2）に、もとはよし
ある人のをちふれて、かすかなるさまにてす
む人あり、心すくにしていつはりをかまへす、いや
しきわさもせず、つまをむかへて、いつとせに
なれとも、子をももたてなくさむよすかなく
くらしければ、かゝることなむ神にいのりて』(二丁ウ)

こそめくみはあれとつまもろとも、五条の
天神へまふて、ぬさたてまつり心をつくして
のみのり申しけり、此天神と申したてま

つるは、すくなひこなのみこと、申す、すなはち
あまつ御神たかんみむすひのみことの御子

なり、此神のをんかたちいとちいさくて、さ、き
の羽を御衣（注3）とし、か、み草のかぢ（注4）を舟に
つくり、和田津海の上にかみあらはれまし』(二丁ウ)
ぬ、をほあなむちのみことすなはち此神と力
をあはせ、御心一つにして、天下をつくり、また
うつしきあを人くさ、をよひ、けもの、ため、その
病を、さむるさまをさため、又鳥けたものはう

むしのわさぢ（注5）ひをはらはむため、そのまし
なひやむるのりをさためましますゆへ（注6）に、
今の世までをほんたから、ことくそめく
みをかふむれり、誠にいはれある御事なれば』(三丁ウ)
(挿絵)』(三丁ウ)

あらはにはいひかたし、されは此ものとも、
よるひるこもりゐて、いのり申しけり、ある
暁の夢に、秋風さと吹わたり、やたれので（注7）
のむすほふれたるを見れば、もしのかたちに
むすひたり、なにとなくよみてけるに哥
なり、

あまつ神ちはしらあまりいをはしら

うみます道のことほりとしれ』(四丁ウ)
夢さめてつまにかくとかたれば、つまも同じ
つけなりといふ、されと女は御歌のこゝろを
しらす、男は涙をなかしてねかひはかなへ
りと九度ぬかつく、つま此御哥のこゝろは
いか、ましますとどふ、男されはこれはめてたき
御哥なり、我くは子のなきことをなきてい
のり申に、此御うたたまはる事、まさしく祈は

かなひたるそや、天津神とはあめにます」(四丁ウ)

たかんみむすひのみことの御事なり、此神千

五百のみ子をうみませり、その御子のうちに

すくなひこなのみこと、申して、めにも見えたま

はぬほとのちひさき神ます、たかんみむすひ

のたなまたよりもれ落たまふ、此神あわは島

にいたり、粟からにのほり、すなはちはしかれ

わたりまして、とこよの国にいたりましき、

今此五条の天神といわはあまつり申なり、」(五丁オ)

子をうむことはりは神代よりつきせぬ道の

ことはりにして、やかて子うむへきそとつけ

まします御哥なりとかたれば、つまいとうれ

しく、御かくらなとたてまつり、心たのもしくて

かへりぬ、

むすふこのみ

秋もや、露置そふるまゝに、庭の木のみは

いつしか色つくを見るにも、みつからはいまた」(五丁ウ)

神のしるしもなしとつまうちかこては、男聞

て女ほどあさましきものはなし、たとひおひ

はつるまで子もたすとも、いか、はせん、神

をうらみたてまつることは、かしこまる(律)事そ、

かまへてくさな思ひたまひそといふ、つまも

ことはりなりとおもひくらすすほとに、はらは

ふくらかならねと、久敷ひのと、まりけれ

は、あやしと思ふほとに、月かたなりけるにや、」(六丁オ)

子うむへきこ、ちしければ、さてやとて

うときしたしき人よひつとひ、その事

くくのまふけなとてまつとするに、なに

のなやみもなく子をうみぬ、とりあけて

見れば、かしらはまめの大きさなり、母は

あやしといへと、男はさこそはおはさめ、祈

し神にかしこくもあやかりたてまつりし

なりといみしくよるこふ、又長岡に三太と」(六丁ウ)

といふものあり、いとけなきより、此家につかへ

しものなり、今は六十にあまり、猶としころ

出入して、夫婦のあはれみをうけて、月ほしと

あふきたり、かれいちはやく来り、此子を見て

あやしや、昨日の夜の夢にこかねのまめをえ

て、伏見の桃園にうまて枝葉しけり、かすく

のまめなれりと見しか、此若子の事ならん

と手のうちにいれて、なにやらい^はわ^あ事』(七丁才)

(挿絵) (七丁ウ)

とて「^注千代ませ〜よもきか嶋の鶴に亀に

よはひはゆつれ、生ひたつ田はたのほなみは

よりくれ、もちとりもちつく鏡はか、やく、朝日の

光とあふかん、えのこのころ〜」といふみる〜

わらふ、父うれしかりて、名をつけさす、さらは

まめ太郎のわかといはむとて、ちかやもて

こかひするわらうたのやうなる物をつくり、

きぬ縮しき、つなにすかりて生ふしたつ』(八丁才)

かくてかしこさ人にこえ、たけき心もありけり、

されとはたちになるまで、かたちまめほどの

男なり、太郎つらく思ふやう、我をいのり

たまひし神は、いとち^いさき神とや、されは

とてかく人なみならぬすかたにはしたま

ふらんと手ならふて、まさぐりに、

あ^はからにはしかれわたる神なれば

ひとをもかくやめくみますらん』(八丁ウ)

さらは此神のいたりましけむ、常世の国

とかやに行て、神をうらみま^あらせん

とおもひたつ、さていか、してよけん、夜の

まにぬけいてんや、父母につけてゆか^あんや、

つけなはと、めたまはん、つけすはなけき

たまはん、なけきたまはず、と、めたまはぬ、

てたてしてゆかむものをと思ひめくらし

つ、父母にいふやう、五条の天神あらはれ』(九丁才)

まして、我すむ常よのくに、来り、みやつかへ

せよ、三年のうちに身の人なみになるへき

しるしあるへしとつけをか^あむれり、尋

てま^あゆるへし、三年のほとわかれま^あゆる

事はかなしけれども、ひと、なりてかへり

つかへま^あゆらせむ事は、うれしがるへしといふ、

母はなけ、と父はよろこひなれば、此神の

たま^いし子なれば、とまれかくまれ、た、神』(九丁ウ)

のまに〜せは、行す^あ事^あよけん、はやとくいね、

道の用をはいか、せんといふ、太郎それは

神の御国にゆくなれば、神の御はから^あゆや

あるらん、父うなつきけにさもこそあれ、

やういに小太刀うたせんや、それもうつほと

の待久しがるへければ、大針小針に鼠の

尾をさやにかけてたへ、身の守とせむといふ、やすき事とてこしらへてえさす、母』(二〇丁才)
ひた、れ大口ぬゆてきす、今日は三月中はよき日なればまかてなむとて出たつ、父母なく、送りければ、太郎母の袖にとりつきて、

ちらてまてねにはかへらすかそいろは
かけによりそふこのみある世と

されとなこりはつきせず、さていつくをさしてゆくそと、へは、先五条のみやしるに参り、』(二〇丁才)
神の御はからひにまかせはへらんと立別ゆく、

千本のさくら

道いそくとはすれとうし馬をよき、はかしくもあゆまされす、あしいとたゆくなりぬ、いか、してあしやすめゆかんと思ふに、上の女房の車にのりて、五条を西へゆくあり、まめ太郎よろこひ、やかて車にのり』(二二丁才)
(挿絵)』(二二丁才)
すたれのしたにかくれるたり、見あやしむ人

もなし、堀河を西へ橋をわたれば、こゝにてはねをり、天神へまゆり、行末こまやかに祈り、その夜は和幣のもとに、哥よみてあけり、
神やもる常世のくにはしら雲の
たつ旅衣ゆきかへる身を

しらぬ常世の国の通路、雲のいつこにや
あるらんとおほつかなし、神のつけもなく』(二二丁才)
夜もあけ、れは、いつくをさしてゆくへしとも
おほえず立出けるか、和幣のもとにたんさくあり、読人の名もなくて、

常世とはかつらの里のゆふ日かけ

かすみに、ほふ花のしたふし

まめ太郎三度いた、き、さては常世の
国は桂の里の花の下陰にて、木のもとに
神やますらん、ほとちかければ、うれしき』(二二丁才)
いはむかたなく、たんさくをた、みふところにして、又西にむきてゆく、此たんさくの
いてところを、後によく、きけは、そのころ
かつらの里に、夕日の長者とて、ゆたかなる
人すみけり、むすめを常世の君とそいひ

ける、世にならひなきすかたにて、心さまも
いとあてなり、わかきてんしやう人など、哥
をやり文をかよはし、いひよるかたもをほ』(二三丁才)
かれと、うけひく事もなく、春は花園の
霞をあはれみ、秋は草葉の露をかなしむ、
折にふれては、つよからぬことのはのなかれ
に心をなむよせける、これをきく人、けさう
せぬはなし、あるてんしやう人、此天神へ
まゐてたるに、わかき人く、此神のいた
りましけん、常世の国とは、いつくのことによ
といふ、あるかたちちめ、たんさく取いて、』(二三丁ウ)
常世とはかつらの里のとかのむすめの名
になぞらへ、夕日の長者といふ事をもかく
よみいれ、とこよといふによせて、花のしたふ
しなとつらねたるたはむれ事なりけれ
と、まめ太郎かまこ、ろに祈りたるゆへにや、
長者かもとへ、神の手引したまふなるへ
し、桂の里にとくゆかんと又花見車を
見つけ、それにのりてゆく、此車嵯峨の』(二四丁才)
かたへやりて、嵐山の花見るにてそありける、

まめ太郎は、大堰川の辺におり立て、しはし
花を見るに、かたへのひとなにやらん、花の
哥とてつふやく、まめ太郎も、鼠のひけ
もてゆへる筆とりいて、ちりたるさくらの
はなひらにかきつく、

花にうきあらしの山にいかねは

ちもとのさくらうつし植けん』(二四丁ウ)

花の夕は下詠にあかて、葦葉のかけにぬけ
るかくれはてなは、かつらまでゆくもおほ
つかなし、よきたよりもかなといせきの上に立

て見るに、花見る人のとり落したる盃の
なかれよるを見つけ、よき舟こそうかれ

きぬとはねのりて、波のまに／＼なかれ行、
梅津川をすき、桂（音）川の西のかたへほそき

なかれにしたかひて、えもいわぬ池に』(二五丁才)
(挿絵)』(二五丁ウ)

なかれ入る、いとめてたき所なり、

池のうきくさ

さかつきよりあかりて見れば、八重のさくら
のさかりなるあり、是こそ神のやとりまします

花ならむとうれしくて、

これはこそ桂(注9)の里のゆふ日かけ

かすむ常世のはなもありけり

と読で、花の陰にやすらひ、袖かきあはせ、』(二六丁才)

ねかはくは御影おまかまれたまへとその夜は

花の下ふしして、神やあらはれたまふと

待あかしぬ、夕日の長者か庭ともしらすり

けり、有明の月もおほろにしらみゆくはな

のこす来(注10)、夢もむすはて、春の夜もあけ

わたりぬ、さてやくくと待あかし、こはいかに

神もあらはれたまはずとつふやき、朝風に

ちりゆく花を見やり、又さかつきにのりて』(二六丁ウ)

つき山のくまくとめくり見るに、うきくさの

た、よふを見て、

尋くるとこよの花のかけふかき

いけの萍よるかたもなし

神もまさす、たれにむかひて、身のこともも

なげかんやとて、此哥くりかへしくうち

すんしけるに、常世の君、春の朝明のけ

はい詠で、ひとり庭に立出し、山のかけにて』(二七丁才)

かく哥を小声にうちすんしたるをき、て、

常世の花といひ、うきくさのよるかたもなし

など、つ、けたる、我をけさうする人のしのひ

たるならん、はしたなしとて、とくうちに入り、

人してひそかに尋さす、女わらはめ、をほ

く出来、いかなる声のきこへはべ(注11)りし、いつくの

ほとにき、たまひしといふ、君はすたれの

うちにて、声はいかにもちいさくきこへしかとも、』

(二七丁ウ)

ことのはのあやはいとたしかなりし、つき山の

かけにきこへしといふ、あやしやなとかやく

いひて来る、まめ太郎さは我をたつぬるな

らむ、かくれてまちかく来る者のあしを大針

もてさし、からきめ見せてくれんするそ

とかけあかり、草のかけにかくれ、大針ぬき

もて待けるか、ふるき哥を思ひいて、

牛の子にふまるな庭のかたつむり』(一八丁才)

つのはれはとて身をはたのみそ

といふ事あり、我身もかたつむりに同じ、

針もてりとて、身をたのまは(注12)、女わらはに

ふみころされんもよしなし、あらはれて
 ありしやうをかたり、神のます常世の花
 をたつねとはんと石の上にはしりあかり、
 我をたつねたまふやといふ、人くおとろ
 き、かゝる人も世にありけり、是は君に』(一八丁ウ)
 まらいせんと手のうちのせてもてく、君は
 いみしくよるこひ、いつこより来る人ぞ、たれ
 人の子にておはず、名をはなにとなのりた
 まふそと、へは、父母もなし、名はまめ太郎と
 いふなり、かく人なみならぬすかたの口をおしく、
 父母の我をいのりし神のいます国にゆきて、
 うらみたてまつらんと思ひ立しなり、流に
 ひかれてこゝに来ぬ、こゝはいかなる人のみうち』(一九丁オ)
 にてはへるやらんといふ、これは夕日の長者の
 みたちなり、まめ太郎もしやこゝに常世の国
 といふ所やはへると、へは、人くわらひて、
 此姫を常世の君といふなり、かくいふ国は
 しらすといふ、さてはつけの御哥に、桂(常世)の
 さとの夕日影とは、此長者のことにて、常世
 の君のなさけにより、花の下ふしして、

おひたつ事のあるへきそとつけたまふもの』(一九丁ウ)
 ならん、さらはしはしこゝにと、まりゐて
 見むと思ひ、かゝる人なみならぬものをも
 すてたまはずは、こゝにと、まりつかへまらいせん
 といふ、君いとあはれかり、長者にかくといひ
 て、もてはやし、つねに君かそはをはなれず、
 つれくなくさめ、やまと哥よむ友となりて、
 いとまめやかなりければ、君をはしめ家のうち
 こそりて、いとはおしみたり、』(二〇丁オ)

【翻刻B】

豆太郎物語

目録

- 一 秋の木綿垂(昔目)
- 一 結ぶ木の实
- 一 千本の桜
- 一 池の浮草
- 一 草の籬
- 一 歌合』(二丁オ)
- 一 恋の山路

一 岩間の花

一 鬼の醜草

一 帰る道芝

一 千代の松陰

一 輝く朝日

目録終はり』(二丁ウ)

豆太郎物語

秋の木綿垂

昔、都京極の末に、元は由

ある人の、落ちぶれて幽かなる様にて住

む人あり。心直ぐにして、偽りを構へず、卑

しきわざもせず。妻を迎へて五年に

なれども、子をも持たで、慰むよすが無く

暮らしければ、「かかることなん神に祈りて」(二丁才)

こそ恵みはあれ」と、妻もろとも五条の

天神へ詣で、幣奉り、心を尽くして

のみ祈り申しけり。この天神と申し奉

るは、少彦名命と申す。即ち、

天つ御神高皇産靈尊の御子

なり。この神の御貌、いと小さくて、鷓鴣

の羽を御衣とし、白薺草の皮を舟に

作り、わたつ海の上に浮かみ現れ坐し』(二丁ウ)

ぬ。大己貴命、即ち、この神と力

を合はせ、御心一つにして、天下を作り、また、

現しき青人草、及び、獣のため、その

病を治むる様を定め、また、鳥獸、昆

虫の禍を払はんため、その呪

なひ止むる法を定め坐します故に、

今の世まで大御宝、悉くその恵

みを被れり(注馬)。誠に謂はれある御事なれば、』(三丁才)

(挿絵)』(三丁ウ)

露には言ひ難し。されば、この者ども、

夜昼籠り居て、祈り申しけり。ある

暁の夢に、秋風さと吹き渡り、八垂れの垂

の結びほれ(注馬)たるを見れば、文字の形に

結びたり。何となく読みてけるに、歌

なり。

天つ神 千柱余り 五百柱

生み坐す道の 理と知れ』(四丁才)

夢覚めて、妻に「かく」と語れば、妻も「同じ

告げなり」と言ふ。されど、女は御歌の心を

知らず。男は涙を流して「願ひは叶へ

り」と九度額づく。妻、「この御歌の心は

いかが坐します」と問ふ。男、されば、「これはめでたき

御歌なり。我々は子の無き事を嘆きて祈

り申すに、この御歌賜る事、正しく祈りは

叶ひたるぞや。天つ神とは、天に坐す」(四丁ウ)

高皇産霊尊の御事なり。この神、千

五百の御子を生み坐せり。その御子の内に

少彦名命と申して、目にも見え給

はぬ程の小さき神坐す。高皇産霊

の手股より漏れ落ち給ふ。この神、淡島

に至り、粟茎に上り、即ち、弾かれ

渡り坐して、常世の国に至り坐しき。

今、この五条の天神と齋ひ祭り申すなり。』(五丁オ)

『子を生む理は、神代より尽きせぬ道の

理にして、やがて子生むべきぞ」と告げ

坐します御歌なり」と語れば、妻、いと嬉

しく、御神楽など奉り、心頼もしくて

帰りぬ。

結ぶ木の実

秋もやや露置き添ふるままに、庭の木の実は

いつしか色づくを見るにも、「自らは未だ」(五丁ウ)

神の験も無し」と、妻、うち託てば、男、聞き

て、「女程あさましきものは無し。たとひ、老い^(注17)

果つるまで子持たずとても、いかがはせん、神

を恨み奉る事は、畏まる事ぞ。

構へて構へて、さな思ひ給ひそ」と言ふ。妻も

「理なり」と思ひ暮らす程に、腹は

ふくらかならねど、久しく火の止まりけれ

ば、「あやし」と思ふ程に、月方なりけるにや、』(六丁オ)

子生むべき心地しければ、「さてや」とて、

疎き親しき人呼び集ひ、その事

々の設け^(注18)などして待つとするに、何

の悩みも無く子を生みぬ。取り上げて

見れば、頭は豆の大ききなり。母は

「あやし」と言へど、男は「さこそはおはさめ。祈り

し神に畏くもあやかり奉りし

なり」といみじく喜ぶ。また、長岡に三太と^(注19)』(六丁ウ)

言ふ者あり。幼けなきより、この家に仕へ

し者なり。今は六十に余り、なほ年頃

出で入りして、夫婦の憐みを受けて、月星と仰ぎたり。彼、逸早く来たり、この子を見て、

「あやしや。昨日の夜の夢に、金の豆を得て、伏見の桃園に植ゑて、枝葉繁り、数々

の豆成れりと見しが、この若子の事ならん」

と手の内に入れて、何やらん、祝ひ言（七丁オ）（挿絵）（七丁ウ）

とて、「千代坐せ千代坐せ、蓬が鳴の鶴に亀に齡は譲れ、生ひ立つ田畑の穂波は

寄り来れ、糰取り餅搗く、鏡は輝く、朝日の

光と仰がん、狗（註四）のころころ」と言ふ、見る見る笑ふ。父、嬉しがりて、名を付けさす。「さらば、

豆太郎の若と言はん」とて、茅萱もて

子飼ひする円座のやうなる物を作り、絹綿敷き、綱に縋りて生ふし立つ。」（八丁オ）

かくて、賢さに越え、猛き心もありけり。

されど、二十になるまで、貌、豆程の

男なり。太郎、つらつら思ふやう、「我を祈り

給ひし神は、いと小さき神とや。されば

とて、かく人並みならぬ姿にはし給

ふらん」と、手習ふ手弄りに（註五）、

粟莖に 弾かれ渡る 神なれば

人をもかくや 恵み坐すらん」（八丁ウ）

「さらば、この神の至り坐しけん常世の国

とかやに行きて、神を恨み参らせん」

と思ひ立つ。「さて、いかがして良けん。夜の

間に抜け出でんや、父母に告げて行かんや。

告げなば止め給はん、告げずは嘆き

給はん。嘆き給はず、止め給はぬ

手立てして行かんものを」と思ひ巡らし

つつ、父母に言ふやう、「五条の天神現れ」（九丁オ）

坐して、『我住む常世の国に来たり、宮仕へ

せよ。三年の内に、身の人並みになるべき

験あるべし」と、告げを被れり。尋ね

て参るべし。三年の程、別れ参らする

事は悲しけれども、人と成りて帰り、

仕へ参らせん事は嬉しかるべし」と言ふ。

母は嘆けど、父は喜びなれば、「この神の

賜ひし子なれば、とまれかくまれ、ただ神」（九丁ウ）

の随にせば、行く末良けん。早、疾く往ぬ。

道の用をばいかがせん」と言ふ。太郎、「それは神の御国に行くなれば、神の御計らひやあるらん」。父、頷き、「実に、さもこそあれ、用意(註2)に小太刀打たせんや」。「それも打つ程の待久しかるべければ、大針小針に鼠の尾を鞘に掛けて賜へ。身の守りとせん」と言ふ。「易き事」とて、拵へて得さず。母、『(一〇丁才)直垂、大口、縫ひて着す。「今日は、三月半ば、良き日なれば、罷でなん」とて、出て立つ。父母、泣く泣く送りければ、太郎、母の袖に取り付きて、

「散らで待て 根には帰らず 父母は影に寄り添ふ この身ある世と(註3)」

されど、名残は尽きせず。「さて、いづくを指して行くぞ」と問へば、「先づ五条の御社に参り、」(二〇丁ウ)神の御計らひに任せ侍らんと、立ち別れ行く。

千本の桜

道急ぐとはすれど、牛馬を避き、はかばか

しくも歩まれず、脚いと弛くなりぬ。「いかがして脚休め行かん」と思ふに、

上の女房の、車に乗りて、五条を西へ行くあり。豆太郎、喜び、やがて車に乗り、』(二丁才)

〔挿絵〕(二丁ウ) 簾の下に隠れ居たり。見怪しむ人も無し。堀川を西へ、橋を渡れば、ここにて

跳ね降り(註4)、天神へ参り(註5)、行く末細やかに祈り、その夜は和幣の下に、歌讀みて居けり。

「神や守る 常世の国は 白雲の

立つ旅衣 行き帰る身を

知らぬ常世の国の通ひ路、雲のいづこにや

あるらん」とおぼつかなし。神の告げも無く、』(二二丁才) 夜も明けければ、「いづくを指して行くべし」とも

覚えず立ち出でけるが、和幣の下に短冊

あり。読み人の名も無くて、

常世とは 桂の里の 夕日影

霞に匂ふ 花の下臥

豆太郎、三度戴き、「さては常世の

国は桂の里の花の下陰にて、木の下に

神や坐すらん」。程近ければ、嬉しさ」（一二丁ウ）
言はん方なく、短冊を畳み、懐

にして、また、西に向きて行く。この短冊の
出で所を、後に善く善く聞けば、その頃、
桂の里に、夕日の長者とて、豊かなる

人住みけり。娘を常世の君とぞ言ひ
ける。世に並びなき姿にて、心様も

いと貴なり。若き殿上人など、歌

を遣り、文を通はし、言ひ寄る方も多」（二三丁ウ）

かれど、承け引く事も無く、春は花園の

霞をあはれみ、秋は草葉の露をかなしむ。

折に触れては、強からぬ言の葉の流れ

に心をなん寄せける。これを聞く人、懸想

せぬは無し。ある殿上人、この天神へ

詣でたるに、若き人々、「この神の至

り坐しけん常世の国とは、いづくの事にや」

と言ふ。ある上達部、短冊取り出で、」（二三丁ウ）

「常世とは桂の里の」と、かの娘の名

になぞらへ、「夕日の長者」と言ふ事をもかく

読み入れ、「とこよ」と言ふに寄せて、「花の下臥」

など連ねたる戯れ事なりけれ

ど、豆太郎が真心に祈りたる故にや、

長者が元へ、神の手引きし給ふなるべ

し。「桂の里に疾く行かん」と、また、花見車を

見つけ、それに乗りて行く。この車、嵯峨の」（二四丁ウ）

方へ遣りて、嵐山の花見るにてぞありける。

豆太郎は、大堰川の辺りに降り立ちて、しばし

花を見るに、片方の人、何やらん、「花の

歌」とて、つぶやく。豆太郎も、嵐の髭

もて結へる筆取り出で、散りたる桜の

花びらに書き付く。

花に憂き 嵐の山に いかなれば

千本の桜 移し植えけん」（二四丁ウ）

花の夕映え詠むに飽かで、莖菜の陰に居け

るが、「暮れ果てなば、桂まで行くもおほ

つかなし。良き頼りもがな」と井堰（注）の上に立ち

て見るに、花見る人の取り落としたる盃の

流れ寄るを見つけ、「良き舟こそ浮かれ

来ぬ」と跳ね乗りて、波の随に流れ行く。

梅津川を過ぎ、桂川の西の方へ細き

流れに随ひて、えも言はぬ池に』(二五丁オ)

(挿絵) (二五丁ウ)

流れ入る。いとめでたき所なり。

池の浮草

盃より上がりて見れば、八重の桜

の盛りなるあり。「これこそ神の宿り坐します

花ならん」と嬉しくて、

「散ればこそ 桂の里の 夕日影

霞む常世の 花もありけり」

と読みて、花の陰に休らひ、袖搔き合はせ、』(二六丁オ)

「願はくは御影拜まれ給へ」と、その夜は

花の下臥して、「神や現れ給ふ」と

待ち明かしぬ。夕日の長者が庭とも知らざり

けり。有明の月も朧に白み行く花

の梢、夢も結ばで、春の夜も明け

渡りぬ。「さてやさてや」と待ち明かし、「こはいかに、

神も現れ給はず」とつぶやき、朝風に

散り行く花を見遣り、また、盃に乗りて』(二六丁ウ)

築山の隈々を巡り見るに、浮草の

漂ふを見て、

「尋ね来る 常世の花の 陰深き

池の浮草 寄る方も無し

神も坐さず、誰に向かひて、身の事をも

嘆かんや」とて、この歌、繰り返し繰り返しうち

誦じけるに、常世の君、春の朝明の気

配眺め(注)て、一人、庭に立ち出でしが、山の陰にて』

(二七丁オ)

かく歌を小声のうち誦じたるを聞きて、

「『常世の花』と言ひ、『浮草』の『寄る方も無し』

など続けたる、我を懸想する人の忍び

たるならん。はしたなし」とて、疾く内に入り、

人して密かに尋ねさす。女、童女、多

く出で来、「いかなる声の聞こえ侍りし。いづくの

程に聞き給ひし」と言ふ。君は、簾の

内にて、「声はいかにも小さく聞こえしかども、』(二七丁ウ)

言の葉の綾はいと確かなりし。築山の

陰に聞こえし」と言ふ。「怪しや」など、がやがや

言ひて来たる。豆太郎、「さは、我を尋ぬるな

らん。隠れて間近く来たる者の足を大針

もて刺し、辛き目見せてくれんずるぞ」

と駆け上がり、草の陰に隠れ、大針抜き
もて待ちけるが、古き歌を思ひ出でて、

「牛の子に 踏まるな庭の 蝸牛」（一八丁オ）

角あればとて 身をば頼みそ

と言ふ事あり。我が身も蝸牛に同じ。

『針持てり』とて、身を頼まば、女、童に

踏み殺されんも由なし。現れて

ありしやうを語り、神の坐す常世の花

を尋ね問はん」と、石の上に走り上がり、

「我を尋ね給ふや」と言ふ。人々、驚

き、「かかる人も世にありけり。これは君に」（一八丁ウ）

参らせん」と、手の内に乗せて持て来。君は、

いみじく喜び、「いづこより来たる人ぞ。誰

人の子にておはす。名をば何と名告り給

ふぞ」と問へば、「父母も無し。名は豆太郎と

言ふなり。かく人並みならぬ姿の口惜しく、

『父母の我を祈りし神の坐す国に行きて、

恨み奉らん』と思ひ立ちしなり。流れに

引かれてここに来ぬ。ここはいかなる人の御内』（一九丁オ）

にて侍るやらん」と言ふ。「これは夕日の長者の

御館なり」。豆太郎、「もしや、ここに常世の国
と言ふ所や侍る」と問へば、人々笑ひて、

「この姫を常世の君と言ふなり。かく言ふ国は
知らず」と言ふ。「さては、告げの御歌に、桂の

里の夕日影とは、この長者の事にて、『常世

の君の情けに依り、花の下臥して、

生ひ立つ事のあるべきぞ』と告げ給ふもの』（一九丁ウ）

ならん。さらば、しばしここに留まり居て

みん」と思ひ、「かかる人並みならぬ者をも

捨て給はずは、ここに留まり、仕へ参らせん」

と言ふ。君、いとあはれがり、長者に「かく」と言ひ

て、もてはやし、常に君が傍を離れず、

徒然慰め、やまと歌読む友となりて、

いと忠実やかなりければ、君を始め、家の内、

挙りていとほしみたり。』（二〇丁オ）

注1 国文研「新日本古典籍総合データベース」マイクロフイ

ルム記号三三三二―三三三三―四

2 「丞」の字母を「衛」から「恵」に訂す書き入れあり。

3 「御衣」に墨書にて「みぞ」とのふりがなあり。本文と

同筆とおぼしい。

4 「て」に朱書にて濁点のみ書き入れあり。

5 「かしこまる」の「こ」二画目と「ま」に、朱書にて上書きの修訂あり。判読しかねるが、あるいは「かしこしる」とあったとおぼしき本文を、なぞり書きと上書きにて訂したもののか。

6 朱書にて「千代ませ……ころく」を括るカギ括弧様の書き入れあり。

7 注2に同じ。

8 「桂」と思われるが、筆跡は「植」と酷似し、紛らわしい。

9 注8に同じ。

10 注2、注7に同じ。

11 「へ」に朱書にて濁点のみ書き入れあり。

12 「、」に朱書にてミセケチあり。

13 注8、注9に同じ。

14 原本一丁表「ゆふして」、二丁表「夕して」を「木綿垂」と解した。

15 「日本書紀」巻第一神代上の、以下の記述（訓み下しは岩波文庫本に拠る）に基づくが、多く漢字表記を改めた。
「一箇の小男（少彦名命）有りて、白藪の皮を以て舟に

つくり、鶴鷄の羽を以て衣にして、潮水の随に浮き到る。」
「夫の大己貴命と、少彦名命と、力を戮せ心を一にして、天下を経営る。復顕見蒼生及び畜産の為は、其の病を療むる方を定む。又、鳥獸・昆虫の災異を攘はむが為は、其の禁厭むる法を定む。是を以て、百姓、今に至るまでに、咸に恩頼を蒙れり。」

16 原本「むすほふれ」を「結ほほれ」とした。

17 原本「おひ」を「おい」と解した。

18 原本「まふけ」を「まうけ」と解した。

19 原本「三太と」の二つ目の「と」を衍字と解した。

20 原本「えのこ」を「ゑのこ」と解したが、引き続き検討したい。

21 原本「手ならふて、まさくり」は、本来、ここは読点で区切ることなく「てまさぐり」と解し、また、「手ならふ」からそのまま続くと解すべきではないか。今、「手習ふ手弄りに」としたが、ここも引き続き検討したい。

22 原本「やうい」を「ようい」と解した。

23 本稿においては、他の和歌ともども、掛詞・縁語等の技法には触れない。本文内容の分析等に関しては、稿を改めるものとする。

- 24 原本「はねをり」を「はねおり」と解した。
- 25 「五条の天神」への経路としては、位置関係が不審である。
- 26 原本「いせき」を「ゐせき」と解した。
- 27 原本「詠」を、意味を限定すべく「眺め」と表記した。なお、一五丁表の「詠」は、文脈上、そのまま「詠む」と表記している。

※本稿は、二〇二二年度科研費（基盤研究（C）・課題番号：二二K〇二五六一）による成果の一部である。また、二〇二二年度ノートルダム清心女子大学学長裁量経費教育改革研究助成金（「ノートルダム清心女子大学特殊文庫目録」改訂に向けての資料整理および調査・研究」（代表者：野澤真樹））による成果の一部でもある。

（なかい けんいち／本学教授）